

泥

だ

ん

ご

作

り

遊

び

の

醍

醐

味

”はじめまして。東京の「のびちゃん」ともうします。1歳の男の子の母です(三十路半ば)。昨日、「光れ!泥だんご」の再放送を見ました。ぜひ主人や子どもにも見せたいすばらしいものでした。再々放送は、ないのでしょうか?

なぜこんなに、旦那にもみせたいのか…それは、わたしが幼稚園のころ、泥だんごを光らせようと、必死になっていたからです。そう…最後にだんごをこわして、泣きそうになった男の子のように…大事に大事にしていました。箱にいれて、光った泥だんごをとっておいて、つぎに見た時、ポロポロになって泣いたのを今も…今も切なく思い出すのです。

あの時の思いが凝縮されていたといったら…分かるでしょうか…自分でにぎった、はじめて光った泥だんご。幼稚園の園庭のブロックの下の土がいちばんきれいに光りました。

こんなに年をとってもわすれられない…何を…わたしは、何をにぎったのでしょうか? 思い出? 宝物?? 自分の中の記憶を鮮明に呼びさます映像でした。光る泥だんご。わたしもまた作りたいです。わたしも仲間に入れてください。またきますね。のびちゃんでした。“

これは数年前に「日本泥だんご科学協会」のHPに書き込みされたものです。「泥だんご学会」のようなものがあると誤解されている

方もおられるようですが、実はほとんど冗談でホームページを作っているだけなのです。ただそこには全国のいろんな方が掲示板などに自分の苦心などを書き込まれるので「研究交流板」のようになっていますが…。

元に戻りまして、前記の書き込みはそういうもののひとつでした。類似した書き込みはかなりありましたが、たまたま、こののびちゃんという人の投稿を読んだ時、上手な文章に微笑みつつ、ちょっと考え込んでしまいました。この方が(三十路半ば)とご自分の年齢を書かれていたので、つい想像してしまっただけです。幼児だったのびちゃんが泥だんごを作って遊んでいたのは30年前。その当時、のびちゃんのお母さんが(どういふ方かは分かりませんが)果たして、子どもが泥を丸めただんごを持って家に帰ってきたりすることを喜んだらどうか? と。「土を家に持って帰っちゃだめじゃない」あるいは「手をちゃんと洗ってね」などという対応をされたのではないのでしょうか? 当時の子どもなら、そういうことも予想できるので、そおとどこか下駄箱とか自転車小屋とか大人の見えないうところに隠しておいて…:というような振る舞いをしていたのではないのでしょうか。子どもにとって泥だんごはそういうアンダーグラウンドな、裏の世界の遊びのひとつだったはず。それが、今、「光る泥だんご」としてブランド化して、こんな知名度のある遊びにな

加用文男 *Written by Fumio Kayo*

泥だんご研究家、京都教育大学教授

ってしまっただけ……。

わたしが「光る泥だんご」のビデオ（現在はDVD）を作った動機のひとつは、知り合いの保育士さんから教えてもらった方法を、このままでは消失してしまうかもしれない日本の貴重な伝統的な遊び文化の遺産として記録しておきたいからです。子どもの足下にある土を使うので一円もお金がかからない（！）この究極の安上がり遊びが、結果的にマスコミの方たちや少なからぬ大人たちの注目を得たのは予想外のことでした。

うれしいやら、びっくりやらでオタオタしているうちに、伝統的な遊びのひとつを結果的に変質させてしまったのではないかと。わたしは2〜3日ちよつとふさぎ込んでしまいました（もちろん、のびちゃんの子供ではありません）。そういう時に、別の方（おそらくは1〜2歳の子供を持つお母さん）の次のような一文の書き込みがありました。

”光る泥だんご。おかげで公園デビューが楽になりました。ありがとうございます。”

これを読んで始めて非常に、そして素朴に「ああよかった」とほつとしたものです。冒頭ののびちゃんという方の思いも「よかった、よかった」「そうか、そうか」と素直にうなずける気になれたのでした。

子連れで公園に出かけて、子どもと一緒に地面にしゃがんで土いじりをしていけば、これは非常に気楽なひと時です。どこから見ても立派な「お母さん」ぶりですし、しゃがんで土いじりしているのでも別に無理をして近くのひととしゃべりながら話をする必要もない。おしゃべりしたくなければいいし、めんどくさければ子どもと土を丸めていればいい。そういう気楽な時の過ごし方と言いますが、そのことを指して「公園デビューが楽になりました」と言われている



たのではないのでしょうか？

わたしがこの遊びの研究を思い立ったもうひとつの動機も、実はこのようなものだったのです。長い時間を園で過ごす子どもたちにとって、昼食前のちよつとあいた時間、お昼寝後の時間、夕方の遊びの時間：そういう時に、ふと地面に手を伸ばして、誰に気兼ねすることもなく土を拾い、さすっては土をかける丸くして、そして最後に磨きにかかる、これはなかなか優れたものの暇つぶしとなるのです。

この遊びの良さはなんとと言っても素材の手軽さですが、作る作業中のゆつたりとした雰囲気も魅力のひとつでしょう。保育園や幼稚園の庭で子どもたちがだんご作りをしている風景も、穏やかでなごやかな時間の象徴のようなひと時です。たいていは2〜3人から3〜4人が寄り集まって、土の相談から、はいている靴の話、先生がどうした、お父さんがどうしたと世間話に花を咲かせながら、時には黙々と：そういう悠久のひと時を過ごしているものです。そうやって、しばしやり続けているうちに、誰かのだんごが光り出して、「おおつ」とか「すげー」とかの声が上がります。素材の手軽さとその場の気楽さ、これがこの遊びの神髄でしょう。

CEL

加用文男（かようぶんお）

1951年生まれ。東京大学大学院博士課程で発達心理学を専攻。子どもの遊び心を研究するうちに、光る泥だんごに出会い、のめり込む。2年間にわたって約200個の泥だんごを作った末、子どもでも作れる「光る泥だんご理論」を完成させた。主な著書は、『子ども心と秋の空―保育のなかの遊び論』『光る泥だんご』（共に、ひとなる書房）、「これがボクらの新・子どもの遊び論だ」（共著、童心社）など。